

世界へ発信！

北の縄文だより

vol.5



～みんなの知らない『JOMON World』～

社会教育課社会教育・文化財グループ (☎ 74-3010)

～縄文人の家とムラ～

縄文人が暮らした家と言えば「竪穴住居(たてあなじゅうきょ)」です。

竪穴住居は地面を掘り下げて床を作り、柱を立てて、屋根をかけてつくった半地下式の建物で、床には土が赤く変色している場所があり、住居の中で火を焚いていたことがわかります。

時代や地域によって大きさや形に違いがあり、中には長さが10m以上もある大きな竪穴住居跡が青森県三内丸山(さんないまるやま)遺跡で見つかっています。また、屋根は「アシ」や「カヤ」などの植物を材料としたほか、「土」で屋根を作った竪穴住居跡が岩手県御所野(ごしよの)遺跡で発見されています。

■入江貝塚の竪穴住居

入江貝塚では縄文時代前期から後期(今からおよそ5千年前から4千年前)の竪穴住居跡が見つかります。時期によって形が異なり、前期から中期は小判や卵のような形で、後期のものは円形でした。

竪穴住居が作られた場所も遺跡の中で変わっていききました。前期から中期にかけては遺跡の山側に多く、後期には遺跡の海側に限られるようになります。調査の結果、これらの住居跡は、狭いところで何回も建て替えが行われていたことがわかりました。

写真は縄文時代後期(約4千年前)の竪穴住居跡の発掘調査の様子です。6m×7mの大きさで地面を掘

り下げていて、柱の穴の跡や石を円形に置いた中で火を焚く「炉(ろ)」の跡が見つかります。この住居跡は、柱の穴の数が多く、火を焚いた炉の跡が3か所見つかったことから、同じ場所で少なくとも3回は建て替えられたと考えられています。



発掘作業の様子

■貝塚のある縄文のムラ



縄文人が暮らしていたころ、入江貝塚はどのような環境だったのでしょうか。

それは、縄文時代の土の中にある花粉の化石を調べるとわかります。入江貝塚の縄文時代の土からはオオイトドリやカラマツソウ、ミズナラやハンノキなどの花粉化石が多く見つかりました。縄文時代の入江貝塚

は木々に囲まれた日当たりのよい場所だったようです。

入江貝塚に暮らした人々は、ムラのまわりの木を切って、竪穴住居の柱材や火を焚くための薪(まき)などを手に入れていたのでしょう。家を建て、ムラのまわりに広がる海や山から食べ物を手に入れ、食べた後の貝殻や動物の骨は貝塚に集めました。

また、ムラに住んでいる人が亡くなったときは、貝塚にお墓をつくって埋葬しました。そうした暮らしが入江貝塚ではおよそ千年にもわたって続けられたのです。遺跡に立つと、何千年も前に暮らした縄文のムラの姿が浮かび上がってきます。

